

「サハリン」を知っていますか？



小西 克己 (こにし かつみ)

前・在ユジノサハリンスク日本国総領事館
農林水産省 農村振興局 設計課 海外土地改良技術室
海外技術班 海外技術基準係長

北海道幌延町出身。2003年から国土交通省北海道開発局で農業農村整備事業に従事した後、2018年3月から2021年4月まで外務省在ユジノサハリンスク日本国総領事館に勤務。2021年4月より現職。写真はサハリン国際スキーマラソン大会参加時、峠の頂上にて。ご満悦な様子を撮影してもらったものの、この直後の下り坂で油断して転倒し、顔から着地。

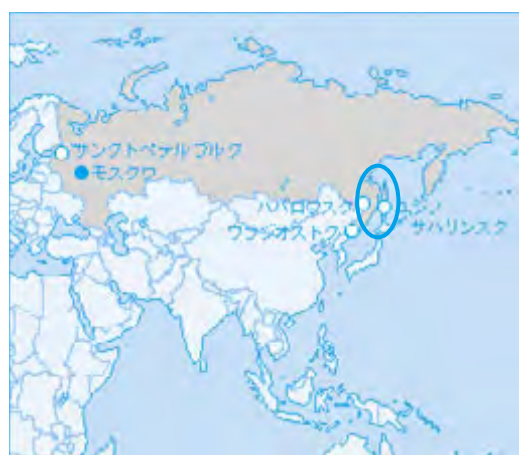
1 「サハリン」について

(1) はじめに

読者の皆様は、「サハリン」と聞いて何を思い浮かべるでしょうか？「昔の樺太で、今はロシア領のサハリン州でしょ？ほら、稚内からフェリーで行けるところ…」という模範回答をいただける方は、どうやらごく少数のようです。実際、私が赴任前に「サハリンに赴任することになりました」という挨拶をしたところ、多くの皆様からは、「どこ？何があるの？何しに行くの？」という反応が大多数を占めていました。最近では、「(人気漫画の)『ゴールデンカムイ』に出てきたところ？」と言われることが増えた気がします。

(2) 地理

それでは、地理から再確認しましょう。まず一番大事なところから、サハリンはロシアが管轄する地域です。ロシアの首都モスクワから東へ約7000km、国内線の飛行機でも8時間かかる位置にあります。



図は外務省HPより
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/russia/index.html>

わかりづらい説明から入ってしまいました。ロシアとかモスクワと言われると「鉄のカーテン」の向こうの遠い話に感じてしまいますので、もう少し身近な例で改めて説明しましょう。位置としては、北海道稚内市の北にあり、宗谷岬からサハリン南端までの最短距離を計測すればたった43kmの距離にあります。大陸からは間宮海峡で隔たれた「島」になります。次ページの図をご覧になればわかるとおり、面積は北海道と

ほぼ同程度です。一方で、人口は北海道の約50万人超に対し、サハリンはその1/10の50万人程度です。

サハリン州の州都はユジノサハリンスク市で、かつては豊原市と呼ばれていました。主要な街はユジノサハリンスク、コルサコフ、ホルムスクの3つで、この南部3市で30万人程度が居住していることから、人口分布が南部に偏っていることがわかります。なお、図は、NPO法人日本サハリン協会様のHPからお借りしてきたものです。



NPO法人日本サハリン協会HPより
<http://sakhalin-kyoukai.com/>

(3) 歴史

さて、サハリンを語る上で最も重要なのが歴史です。ご存じのとおりかつては樺太と呼ばれ、日本の「内地」だったところで、正確に説明するためには紙面が足りないのですが、ごくごく簡単に説明します。

- 1875（明治8）年 樺太・千島交換条約で日本領から樺太が除外される
- 1904（明治37）年 日露戦争開戦
- 1905（明治38）年 日露戦争の停戦後結ばれたポーツマス条約により南樺太（図の北緯50度線以南）が日本領となる
- 1941（昭和16）年 日ソ中立条約が発効、相互不可侵が義務づけられる
- 1945（昭和20）年 8月11日 ソ連軍が北緯50度線を越えて侵入し、交戦開始
- 同年 8月15日 日本、ポツダム宣言を受諾
- 同年 8月22日 樺太での停戦合意が成立
- 1951（昭和26）年 サンフランシスコ平和条約により日本国は樺太に関する権利を放棄

これ以後、樺太はロシアとして統治され現在に至ります。歴史的な解釈については読者の皆様に委ねることとし、ここでは事実のみを記載して終わりにさせていただきます。

(4) 産業

続いて、サハリンの存在意義は何なのか？産業について説明いたします。

ア) 農業

北海道に近く、広い土地を活かした産業…といえば何を想像しますか？そう、農業です。しかし、残念ながらそのイメージは間違いです。私自身、勝手に広大な土地で営まれる農業を想像していたのですが、実際のサハリン（というよりもロシア）の土地利用の多くは森林か原野・荒野でした。その中でも、サハリン州では市や州の大規模資本による「ソフホーズ」（←昔、社会科で習いましたね）がいくつか経営されており、州内で自給することが必要とされる品目が必要分だけ「計画的」に生産されています。

とはいえ、やはりロシアでも地物の野菜は好まれており、ソフホーズ直営の八百屋や鶏肉屋では、いつも長い行列ができています。（右写真）



なお、過去をさかのぼると、日本統治時代にも樺太庁内での自給自足を目指してかつての北海道と同じように農業開拓団が入植し、樺太庁では農業試験場を設置するなど努力を続けたものの、強い酸性土壌と寒さの影響でコメの生産は困難を極め断念したそうです。結果、日本統治時代は、食料品は北海道や本州からの輸送に頼ることとなりました。現在でも自給できない食料品はロシア国内はもとより、中国、韓国、果物はアゼルバイジャン、トルコなどからの輸入となっています。

イ) 水産業

とはいえ、稚内の北にある海に囲まれた島ですので、水産資源は豊富です。日本統治時代に樺太に居住していた人の多くは漁民だといわれていました。ただ、漁のシーズンは短く、季節労働者が多かったことから住民として定住することは無かったといわれています。時は過ぎましたが、いまでもサハリンはカニ、ウニ等の豊富な漁場で、日本にも輸出されています。



ウ) 林業

産業としての農業の育成は成功しなかったものの、当時の政府としてはソビエトとの国境地帯としての役割を重要視し、「人が定住」し地域を発展させることを目指します。そこで目をつけた産業が林業で、国では補助金を支払ってまでして入植を推奨しました。その後、サハリンの豊富な木材を活用し各地には王子製紙をはじめとした製紙業が発展しました。

エ) エネルギー産業

結局、現在のサハリンには、農業も林業も製紙業も戦後大きく発展することはありませんでした。しかしながら、現在サハリン州住民の平均所得は首都モスクワに劣らないほど高い地域とされています。この人口50万人の辺境の島で所得が高い理由は何でしょうか？その答えは「資源・エネルギー産業」の存在です。

前のページの地図に戻しましょう。日露戦争末期に日本海海戦で圧勝しポーツマス条約交渉でも優位な条件下にあったにも関わらず、産業もインフラも整備されていない、人もほとんど住んでいない辺鄙な島をなぜか「南半分」しか獲得できなかった理由は、北部サハリンに石油が埋蔵されていることが要因（日本が石油資源を手に入れることを欧米列強が嫌がったこと）といわれています。現在、サハリンにはサハリン1、サハリン2と呼ばれる資源採掘プロジェクトが進めら

れており、サハリンに莫大な富をもたらすことで住民も益を享受するという仕組みになっています。なお、石油採掘現場はテロ防止等の観点から企業としても国としても重大な機密事項に位置づけられており私自身、現場を見たことがなく、従って本報文でも写真の添付ができませんでした。ご興味ある方は日本の大手商社も関連する「サハリンプロジェクト」についてインターネットで検索ください。

2 ロシア・ユジノサハリンスクでの仕事

(1) 邦人関連の業務

～日本人や日本企業が海外で活躍するための支援～

ユジノサハリンスクに総領事館が設置されたのは2001年。1990年にソビエト連邦が崩壊し、ロシア政府は積極的な外国資本の導入により石油・天然ガス等の資源開発を進める方針を示し、日本企業も参画の意思を示しました。これにより、日本企業支援、邦人保護を目的として総領事館が設置されました。石油採掘プラント建設中は最大300名程度の日本人が一時的とはいえ居住していたそうですが、現在は建設工事が終わって在留邦人は50名程度まで減少しています。総領事館は在留邦人の保護や在留邦人に行政サービスを供与するための業務などを行っております。

(2) ロシア人の日本渡航に関する業務

～ロシアにおける日本旅行ブーム～

話は新型コロナ発生前のことになります。日露双方で査証発給のハードルが大きく下がり、観光を目的とした人の往来が活発になりました。日本人にとって未知の国、ロシア。ロシア人にとって魅惑の国、日本。かつて、日本国旅券（日本のパスポート）を持っている日本人は、世界中の多くの国でビザを事前に取得せずとも入国ができました。しかしながら、世界最強と呼ばれたパスポートですらロシアはビザが必要な国。また、逆にロシアから日本に来るにあたっても、ロシア人は事前にビザ申請を行い、査証発給を受けた上で日本に来なければなりません。

少し話は飛びますが、私は道北地方の稚内にほど近い町で生まれ育ちました。子どものころ（当時1990年代ですのでちょうどソ連の崩壊ごろでしょうか）、稚内のデパートにはロシア人が買い物に来ていたのを覚えています。田舎町の子どもにとっては外国人を目にする機会は希まれでしたので鮮烈な記憶として残っています。そして、その当時、大人たちは彼らを少し遠くから冷ややかな目で見ていた…という記憶もあります。当時はまだ戦後40年の時期。ロシアを目と鼻の先にする北海道には戦争の記憶、引き揚げの苦い記憶が色濃く残っていたのかもしれない。



真岡で殉職した「9人の乙女の碑」（稚内観光協会のHPより）

話を2019年のサハリンに戻しましょう。日露関係は当時の安倍首相とプーチン大統領の友好関係から平和条約締結への方向性を探っていました。ロシア人はソ連時代の負の遺産から抜けだし、皆コカコーラを飲んでNIKEの靴を履いてiPhoneを使っているそんな時代。もともと旅行が大好きなロシア人に対する査証発給の緩和により日本への旅行熱が一気に高まります。ある人は浅草へ、またある人は秋葉原へ、そしてサハリンに住むロシア人は北海道が大好き。ロシアでは旧ソ連時代の抑圧の記憶からか、テレビなどのマスメディアよりも「口コミ」による評価が重視される傾向にあり、人から人へ日本の素晴らしさが伝搬し、年に1度のバカンスを日本で過ごしたいという人が急増しました。とはいえ、日本国査証（ビザ）については日本国大使館や総領事館以外は発行することができません。ですので、旅行者は必ず大使館や総領事館に来て査証の発給を受けることになります。私が査証発給を

担当する査証官という立場で見たロシア人は、私の子どものころの記憶とは大きくかけ離れた陰鬱いんうつなものではなく、日本が大好きな外国人観光客や留学生でした。彼らの多くは日本文化に敬意を表し、本物の寿司を食べることを夢見て、札幌の大通公園を散歩し、秋葉原でメイド喫茶に行く…そんな純粋な観光客でした（中にはそうではない方も存在するので、査証というもので事前の審査があるのも事実ですが）。無事に査証を貼り付けた旅券を受け取った後のうれしそうなロシア人旅行者の顔は非常に印象的でした。新型コロナの今、日本での休暇を楽しみに日々働き暮らしていた彼らは、今年の夏はどこへ行ったかと考えると、残念な気持ちでいっぱいになります。

3 過去を理解することと、将来の理解のために

(1) 北方領土問題

さて、そろそろ残り枚数も少なくなってきましたので、まとめに入らなければなりません。ロシアとの関係を語る上で、やはり北方領土問題を抜きに語ることはできませんが、この問題を誤解無きよう正確に整理すると1冊の本になります。これは私の知識で安易に語るのは誤解を生みますので、本稿ではあえて割愛いたします。とはいえ、隣国ロシアとの関係を語る上で「戦争」は避けては通れないところですので、私の体験を以下に少し紹介いたします。

(2) 遺骨問題と慰霊碑について

1945年8月、ソ連は当時の樺太での国境線であった北緯50度を越えて日本への攻撃を開始しました。また、現在の北方領土のはるか北東に位置するロシアとの国境である占守島しむしゅとうでもソ連軍からの攻撃を受けました。これにより多くの命が失われました。そして、この近傍の旧国境付近には多くの旧日本兵、ソ連兵のご遺骨が今でも眠っています。平成8年、日露関係者の多大な努力により、当時の国境である北緯50度線にほど近いスミルヌィフ市（旧地名：気屯けとん）に、樺太・千島戦没者慰霊碑が建設されました。この慰霊碑は、日本遺族会により管理されており、毎年8月には遺族会の皆

様をはじめ多くの日本人が慰霊のためこの土地を訪れています。



樺太・千島戦没者慰霊碑

とても重要な話題ですので、国境地帯の遺骨についてももう少し詳しく立ち入りましょう。遺骨は今、どの様に扱われているのでしょうか？実は、ロシアの専門団体が旧ソ連兵の遺骨を回収するために今も国境地帯で探索・収集活動を行っています。また、彼らは「遺骨には敵も味方もない」という信念を持っており、発見された遺骨のうち、日本兵の所持品とともに発見されたものについては、日本とロシアの間で日本側に所持品ごと引き渡す約束を結んでいます。このため、毎年、ご遺族や遺骨の専門家（法医学者）で構成される代表団がサハリンを来訪してこの遺骨を受領する遺骨収集事業が実施されてきました。この収集団の事業に対してサハリン州政府やスミルヌイフ行政府も心を込めて支援してくれています。現在はコロナで渡航が難しい状況ですが、多くの方々が再開を心待ちにしているのではないのでしょうか。



その年に発見された遺骨の焼骨式の様子。毎年行われてきましたが、現在コロナで一次中断

(3) 残留邦人問題

さて、終戦当時の南樺太には、約40万人ともいわれる数の日本人が住んでいました。サハリンは島であり、ソ連からの攻撃から全員が待避することは難しく、8月末に実質的にソ連の占領状態となったとき、29万人もの日本人が樺太に取り残されたといわれておりま

す。その後、1946年以降に引き揚げ事業が実施されるまでの間、残された日本人はソ連占領下の樺太で生活を余儀なくされました。しかしながら、引き揚げ事業が行われたにも関わらず、日本へ引き揚げられなかった方々もいらっしゃいました。「樺太残留邦人」です。



樺太残留邦人で当時の日本人会会長であった白畑正義さんは平成30年に日本政府より叙勲を授与され、その授与式には多くの残留邦人がサハリン各地からお祝いに駆けつけました

これは、帰国の意志があったにも関わらず、ソ連の国家建設のためにロシアから出国を認められなかった技術者や現地で結婚したこと等の理由で帰国を断念せざるを得なかった方々の総称です。現在ではご高齢で活動は難しくなってきましたが、残留邦人で構成する団体「サハリン日本人会」はサハリン州政府から認可を受け、NPO日本サハリン協会の支援を得て活動しています。余談ですが、彼らはお酒に酔うと「〴富士の高嶺に降る雪も〜」と『お座敷小唄』（1964年、和田弘とマヒナスターズ）を歌い出します。私が、「何故この曲を？」と聞いたところ、満面の笑みを浮かべて、「昔、海を越えてくるNHKラジオをこっそり聞いて覚えたのよ」と満面の笑みでエピソードを教えてくださいました。このとき私には、苦難の歴史の一端を覗いてしまったような気がして、どのような表情をすべきか戸惑ったことが今でも忘れられません。

「戦争はまだ終わっていない」これはサハリンで仕事をする中で度々聞いた言葉です。兵士のご遺骨も樺太残留邦人も、どちらも祖国を思う気持ちには変わりありません。日本人として知っておかなければならない歴史がサハリンにはたくさんありました。

(4) 相互訪問の重要性と文化交流

～将来の相互理解のために～

繰り返しになってしまいますが、ロシア人は日本のことを愛してくれており、日本文化にも敬意を表してくれています。このため、必然的に日本語を学ぶ人も多くいます。ユジノサハリンスクにあるサハリン日本センターでは、日本語を勉強するロシア人が日本人と気軽に話せる機会を提供しようと、「日本語会話クラブ」という取組を行っています。いつも、多くのロシア人が参加し、一生懸命日本語で話を学ぼうとしています。



この回はロシア版イースターの「パスハ」について卵に絵を描きながらおしゃべりしました

ここまで、ロシア人は日本が大好きだ、と説明しました。これとは反対に、日本人から見たロシアはいかでしょうか？いまだにベレストロイカ直後の寒々しく荒廃し、牛乳を買うのに行列を作る人々、行き往く無表情な人々、酔っ払ったエリツィン…といった、ちょっと引いてしまうようなイメージかと思います。では、実際のところはどうか。そのイメージはロシアについて1時間もあれば覆ると思います。不便な空港、汚いトイレ、身体の高いロシア人に気圧されて、困った顔でため息をついてみてください。きっと、近くにいるロシア人から「どうした？何か困っている？助けましょうか？」と声をかけられるでしょう（もちろん全部ロシア語で）。これが『地球の歩き方』で紹介されている「旅行者に群がる怪しいロシア人」か？と思うかもしれませんが、その多くは、苦勞の絶えない極寒の地ゆえに助け合いの精神で育った心優しいおせっかいなロシア人です。

北海道にお住まいであれば、あなたの町やその近隣町村がロシアと交流をしているかもしれません。交換

留学や相互訪問事業などでロシア人が来て、もし困った顔をしたロシア人を見つけたら、自信を持って日本語で「どうした？大丈夫？」と聞いてみてはいかがでしょうか。きっと気持ちは通じます。

ここまで読んでいただいた皆様はお気づきかと思いますが、日露間では相手国へのイメージにとっても大きな温度差があります。実際、コロナ前の札幌－ユジノサハリンスク間の定期航空便が飛んでいた時代、乗客の多くはロシア人であり、日本人客はわずかでした。確かに、サハリンはロシア観光の目玉ともいえるバレエもサーカスもなく、つい最近まで日本だったため歴史的建造物も日本様式という風変わりな「秘境」扱いでした。これに対し、サハリン州観光局や観光業界は、日本との交流をもっと盛んにしたいという思いは強く、日本人観光客の増加を目指して日本語通訳の育成やパンフレットや地図の日本語版の発行（ロシア人の手作りなので日本語がちょっとヘン）など、目に見える改良^{ほど}を施してきました。私の経験では、ひとたびロシアに足を踏み入れればロシアの持つ独特な魅力で不安は消し飛んでいくものと思います。さて、皆さん、コロナ後の海外旅行の予定はお決まりですか？新千歳空港からわずか1時間半。久しぶりの海外旅行はサハリンから再開してみてはいかがでしょうか。

